

山梨県北杜市

後田遺跡

USHIRODA SITE

市道若神子、大藏線建設工事に伴う発掘調査報告書

2005

北杜市教育委員会
文化資源活用協会
峡北地域振興局建設部

山梨県北杜市

後田遺跡

USHIRODA SITE

市道若神子、大藏線建設工事に伴う発掘調査報告書

2005

北杜市教育委員会
文化資源活用協会
峡北地域振興局建設部

例　言

1. 本書は、国道141号線バイパスと須玉川右岸の河川管理用道路をつなぐ第三次開設工事に伴い実施された発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、10月31日まで須玉町教育委員会、11月1日より北杜市教育委員会が調査主体となり特定非営利活動法人文化資源活用協会を実施機関として実施した。
3. <発掘調査組織>
調査主体 北杜市教育委員会（須玉町教育委員会10月31日まで）
調査担当 北杜市教育委員会（須玉町教育委員会） 山路恭之助
調査委員 深澤裕三（文化資源活用協会）
調査補助員
　浅川英光 伏見徳芳 宮崎夏子 白倉恵美子 小澤久恵 八巻まさ子
　向井直子 長田重子 壱屋てる子
整理員
　高橋正明 橋口勲 石井力 関本美恵子 小尾裕美子 山下千鶴子
4. 本書の執筆・編集は、山路恭之助、深澤裕三 DTP編集 橋口勲 石井力
5. 本調査の出土品、諸記録は北杜市教育委員会が保管している。
6. 発掘調査及び本書の作成にあたって次の諸先生方の御指導、助言をいただき感謝の意としたい。
山梨県埋蔵文化財センター 八巻与志夫（中世） 野代幸和（織文）
村石真澄（近世）

凡　例

1. 本書で用いた地図は、国土交通省国土地理院の数値地図25,000（若狭子1/25,000 平成9年10月1日発行）を元に作成。
2. 遺構及び遺物の挿図中の縮尺は下記のとおりである。
遺構全体図 1/20 1/80 1/300 遺物実測図 土器 1/1 1/2 2/3 石器 1/1 1/2 2/3 1/3
3. 実測図の土器断面が灰色塗りは内黒土器。
4. 遺構及び遺物写真図版の縮尺は、統一されていない。

目 次

例言、凡例

目次、挿図目次、表目次、図版目次

第一章 調査に至る経緯と経過 1

第二章 遺跡の地理的歴史的環境 2

第三章 遺構及び遺物 3

挿図目次

図 1 遺跡位置図 2

図 2 遺跡分布図 4

図 3 立地詳細図 5

図 4 遺跡全体図 6

図 5 1号住居跡・出土遺物 8

図 6 カマド窓側図 9

図 7 1号住居跡・溝・土坑・柱穴 10

図 8 溝遺構出土遺物 18

図 9 遺構外出土遺物 19

図 10 遺構外出土遺物 20

図 11 遺構外出土遺物 21

図 12 遺構外出土遺物 22

図 13 遺構外出土遺物 23

図 14 遺構外出土遺物 24

図 15 遺構外出土遺物 25

図 16 遺構外出土遺物 26

図 17 遺構外出土遺物 27

図 18 遺構外出土遺物 28

図 19 遺構外出土遺物・石器 29

図 20 遺構外出土遺物・石器 30

図 21 遺構外出土遺物・石器 31

表目次

土器観察表 1 32

上器観察表 2 33

石器観察表 34

図版目次

図版 1 ~ 2 発掘風景

図版 3 一号住居、溝遺構出土遺物

図版 4 ~ 11 遺構外出土遺物

図版 12 ~ 14 石器

第一章 調査に至る経緯と経過

須玉町道若神子大藏線道路改良事業に伴い、須玉町教育委員会（以下、教育委員会という）は山梨県岐北地域振興局建設部長（以下、振興局という）より平成16年7月14日付にて「埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて」の照会をうけ、同年7月21日付で教育委員会より、試掘調査が必要な旨の回答をおこなった。

試掘調査は、同年8月26日から9月2日にかけて実施した。結果、溝遺構や遺物が発見された為9月2日付で埋蔵文化財の包蔵地「後田遺跡」として発掘調査が必要な旨、回答をおこなった。9月3日付にて振興局より「遺跡発見の通知について」が県教育長宛提出されたほか、同日付で費用負担する事、出土遺物の権利を教育委員会に委譲する旨の「埋蔵文化財発掘調査依頼書」がだされた。

9月7日付で「須玉町若神子大藏線道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査協定書」を岐北地域振興局と須玉町が締結し、須玉町では発掘調査は緊急性をかんがみ「特定非営利活動法人文化資源活用協会との官民協働事業に関する協定書」（平成15年7月1日調印）により文化資源活用協会に調査を依頼するものとし調査主体、須玉町教育委員会が指導のもと、調査実施主体、文化資源活用協会の体制で実施する事となり、9月7日付で「須玉町若神子大藏線道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」を締結し調査を実施する事となった。

教育委員会は9月14日付の「埋蔵文化財発掘調査の報告について」により発掘調査に着手したことを県教育委員会へ報告した。

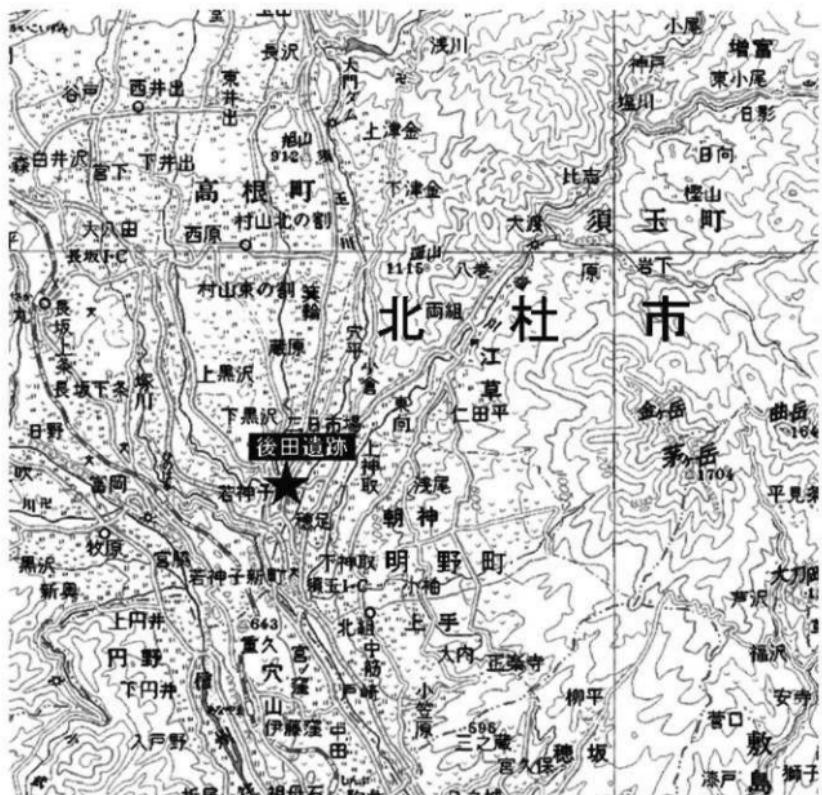
9月16日付で「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木について（通知）」県教育委員会より振興局に対し発掘調査を実施する必要がある旨の通知がだされた。

後田遺跡は、須玉川の支流西川の右岸河岸段丘上、北杜市須玉総合支所（旧須玉町役場）の前庭に所在する。平成13年10月に発掘調査が終了した「御崎前遺跡」は、須玉川右岸の河川沿いの道路から国道141号線へ通ずる若神子一大藏線の第二次開設工事に伴い発掘調査の結果発見された遺跡である。後田遺跡の調査はこれに次ぐ第三次開設工事に伴う調査である。遺跡の調査対象面積は幅14m長さ57mで800m²であったが、調査面積は約600m²にとどまった。調査区域内に5mメッシュのグリッドを南北から北へA B C…、東から西へ1、2、3…というように設定した。発掘調査は平成16年9月15日に始まり11月8日に終了した。調査結果は、平安時代住居跡1軒と掘立柱建物跡の柱穴群、溝1条、住居外土坑4基、暗渠1が確認された。

第二章 遺跡の地理的歴史的環境

北杜市須玉町は、面積約174km²。全体のおよそ85%が山地で、平地は南西部の塩川と須玉川の河岸段丘上に集中する。最も標高が高い金峰山が約2540m、最も低い大豆生田付近で450mで標高差は約2000mあって、本遺跡は526mが測られる。

「若神子の中心を南北に走る県道の左右で、下宿から上宿までを御所村、それから北には御所の北側であった御所北、東には御所の前面に位置する御所前、西側には御所の背後に開けた水田を意味する後田」(註-1)の字名などが示すように中世城館に関連する字名と、後田遺跡に沿って流れる西川を挟んで聳える山城の若神子城に関する字名も今に残る。塩川と須玉川の両河川に沿って、縄文時代から中世城郭まで数多くの遺跡が散在するのが須玉町の特色である。



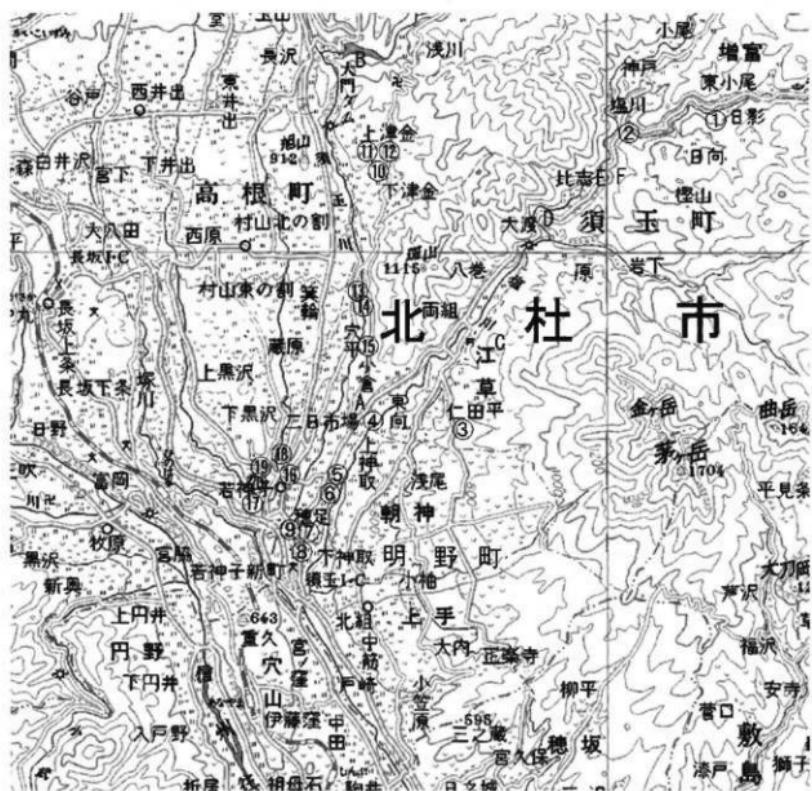
第1図 遺跡位置図 (1/80,000)

塩川水系では標高 996m の大柴遺跡から縄文時代中期と後期の住居跡と配石遺構が、釜瀬川と木谷川の合流して塩川となる標高 830 ~ 860m の地点の塩川遺跡からは縄文時代前期末から中期と古墳時代、平安時代と中世から近世までの複合遺跡と、江戸時代後半から明治時代中期にかけての上坑と人骨 104 体が出土している。塩川中流にあたる江草の上ノ原遺跡は、標高 770 m から 850 m の茅ヶ岳西麓の尾根上にあって、縄文時代中期から後期の住居跡と平安時代の住居跡が検出された。特に縄文時代後期の集落は県下最大のものであった。塩川を下って塩川右岸中位河岸段丘上では縄文時代後期の住居跡と平安時代住居跡が検出された飛津遺跡、鎌倉時代住居跡と数多くの墓坑が検出された塙田遺跡、その南、澗下遺跡では平安時代後半の住居跡が、更に南に下って藤田（とうだ）の標高 490 m の地点から古墳時代後期の腰巻、腰巻北遺跡が検出され、二遺跡に接した腰巻南遺跡からは町内で初見となった弥生時代後期の集落が平成 15 年に、翌 16 年には同時期の高砂遺跡が大蔵新田の統合保育園建設予定地から検出された。

須玉川水系からは須玉川とその支流の波竜川とともに挟まれた相の原台地から、縄文時代前期から後期に至る集落跡の津金御所前遺跡と、早期から中期の住居 20 軒が検出された原の前遺跡。縄文時代後期と平安時代の住居跡、桑原・桑原南遺跡がある。相の原台地の急崖を下って、餓鬼の喉と綽名（あだな）される深淵を跨ぐ万年橋を渡った川又の集落から二日市場の集落まで約 4km に及ぶ須玉川右岸の緩傾斜地から、岡場整備並び工場建設に伴い発掘調査した遺跡は 8 ヶ所を数える。その内、川又南遺跡では、縄文時代中期の住居跡と中期末から後期にかけての幼児を埋葬した埋甕 15 ヶが検出された。川又南遺跡に隣接する西川遺跡からは縄文時代中期の住居跡と 10 数軒の平安時代の住居跡が検出されている。須玉川右岸のほぼ中間の標高 590 m に立地する飯米遺跡からは、縄文時代中期後半の住居跡 4 軒と平安時代住居跡 13 軒が検出されている。

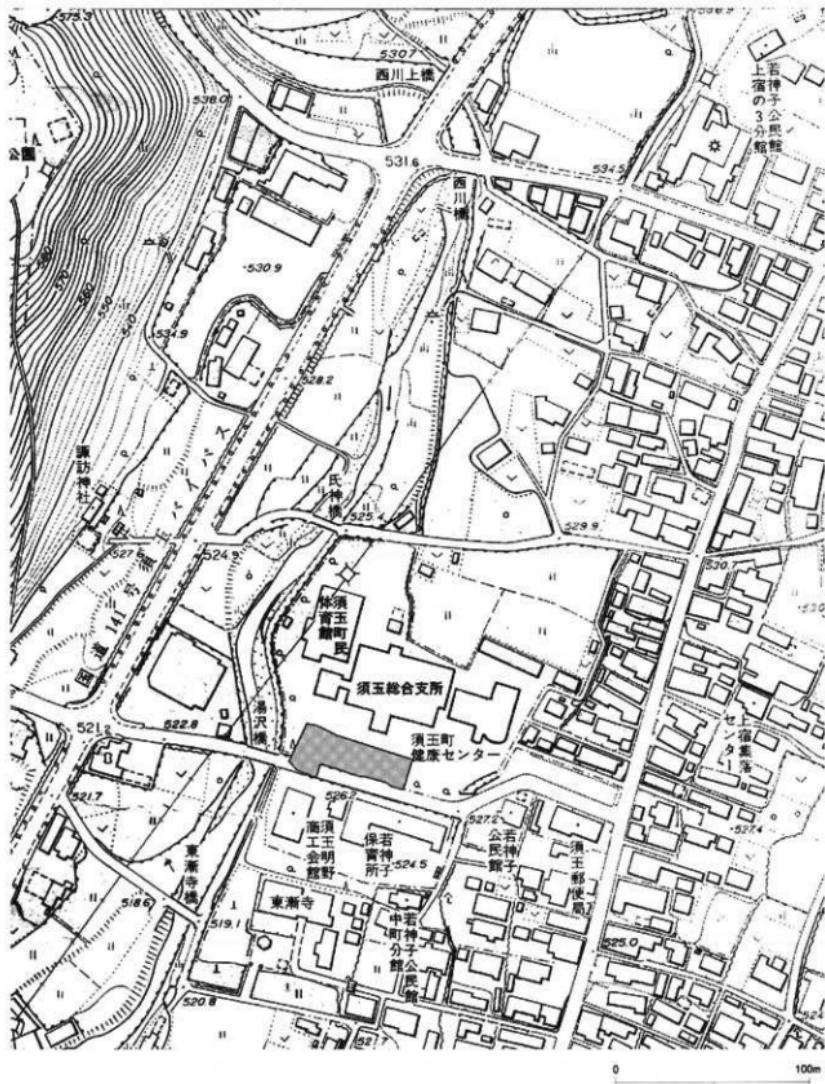
後田遺跡から西、141 号線バイパスを横切った地点で、若神子城の麓から古墳時代後期の湯沢 2 号墳と 3 号墳が検出された。前述の腰巻・腰巻北遺跡に関わる有力者或は村おさの墓との見解を得た。（註 -2 ）

国道 141 号線と中央自動車道が交差する地点の北西、甲川と鳩川に挟まれた比高差約 100 m の七里岩台地の東端から、平安時代住居跡と土師器工房跡が検出された大小久保遺跡がある。この他、中世の城郭跡として若神子城北城・古城・南城が若神子に、中尾の地に中尾城・津金に源太ヶ城・根古屋に獅子吼城がある。狼煙台跡では大渡・比志の城山・増富の前の山等々・須玉川と塩川を見下せる独立峰に占地している。

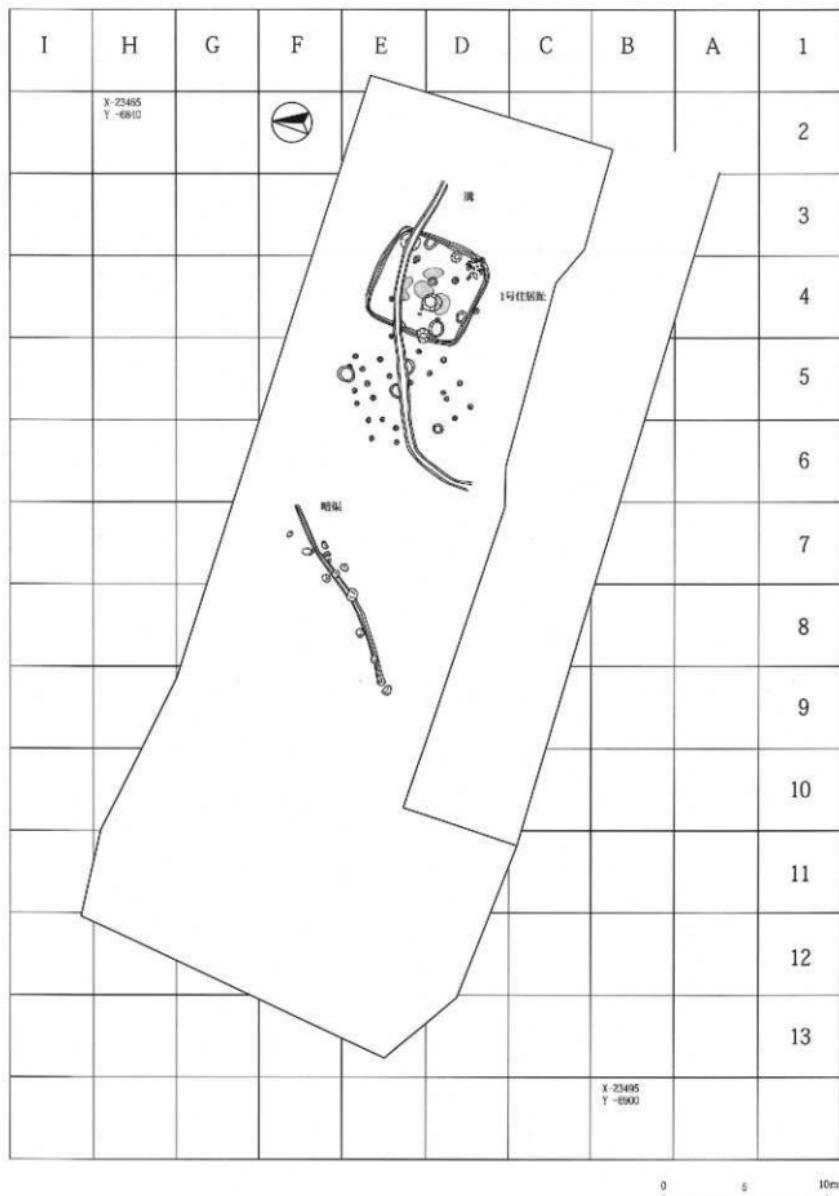


1. 大柴遺跡
 2. 塩川遺跡
 3. 上ノ原遺跡
 4. 飛津遺跡
 5. 塚田遺跡
 6. 滝下遺跡
 7. 腰巻・腰巻北遺跡
 8. 腰巻南遺跡
 9. 高砂遺跡
 10. 御所前遺跡
 11. 原ノ前遺跡
 12. 桑原南遺跡
 13. 川又南遺跡
 14. 西川遺跡
 15. 飯米遺跡
 16. 湯沢2号墳・3号墳遺跡
 17. 大小久保遺跡
 18. 若神子城北城
 19. 若神子城占城
 20. 若神子城南城
- A. 中尾城 B. 源太ヶ城 C. 獅子吼城
- D. 大渡烽火台 E. 比志烽火台 F. 前の山烽火台

第2図 遺跡・文化財分布図 (1/80,000)



第3図 立地詳細図 (1/2,500)



第4図 遺跡全体図 (1/300)

第三章 遺構及び遺物

第1号住居跡（第5図 図版1.2）

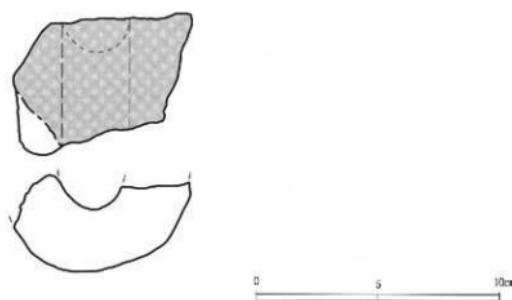
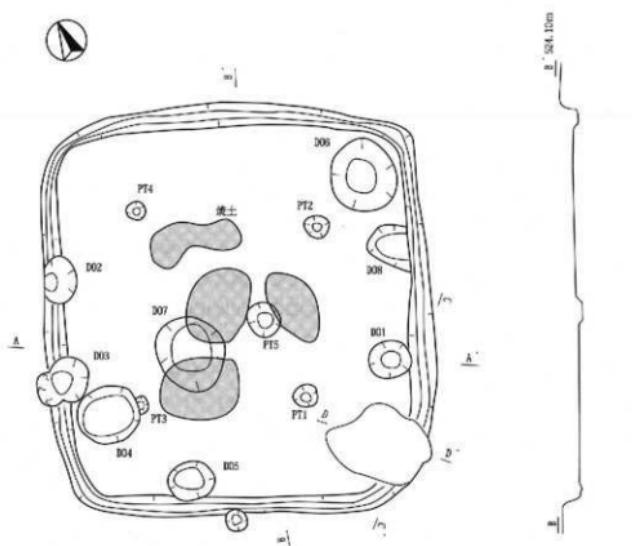
本住居跡はD-4とE-4グリッドに位置している。住居跡の北側を、後世の溝状遺構が東西に切っており、平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸6.4m短軸6.1m面積約39m²を測る。壁高は、北壁25cm、東壁と南壁は20cm、西壁15cmでほぼ垂直に立ち上がる。周溝は幅15cm～20cmで床面から10cmの深さに掘り巡る。床面は暗黄褐色土を床面としており、カマド周辺部のみが堅くしまり他は概して軟弱ぎみである。住居の床面中央部全体が炭化粒子と焼土を含む暗褐色土で覆われ、本来の床面の暗黄褐色土より8cm～10cm厚さで堆積している。これらの覆土を採取し水洗選別の結果、少量の鍛造剥片が検出された。カマドは東南コーナーに構築され規模は長軸1.2m、短軸1.1mを測る。天井石と思われる長方形の石が焚口部前に崩落している。両袖は粘質の明黄褐色土に覆われ、右袖石が4ヶ遺存するものの左袖石は抜きとられ、左袖の上部に丸礫と板状平石2ヶが認められた。カマド内燃焼部と焚口部から焼土が確認された。赤く焼土化した半円形の煙道が検出された。燃焼部中央から丸礫が確認されたが支脚石は検出できなかった。住居に伴う柱穴はP-1からP-4の4ヶあり、P-3は直径20cm深さ44cm穿かれ柱痕が認められた。東壁際から土坑1と8が、西壁際から土坑3と4が検出されたが、左右対称にあるところから東西の建物の主柱穴と考えられる。

出土遺物

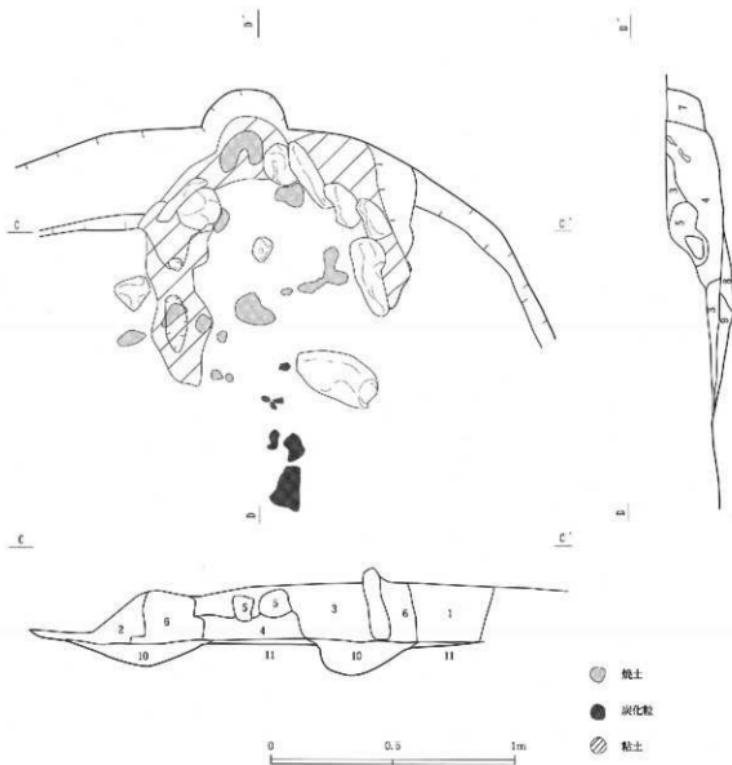
カマド内出土の石器と丸石以外にカマド周辺と、床面から出土した土器片は検出されなかったが、1号住南壁下、床に近い覆土内から大きく欠損した1)羽口P-139(第5図 図版3)が出土している。住居のプラン確認後覆土を除去する過程で出土した遺物については別項の「遺構外遺物」に記載する。

遺構の時期

出土遺物は、小破片が殆どである。床面や集中して出土するカマド内或はその周辺からも資料が得られず、住居跡の規模の大きさとカマドが東南隅に構築されている点などから推定して平安時代10世紀後半から11世紀初頭に属すると思われる。



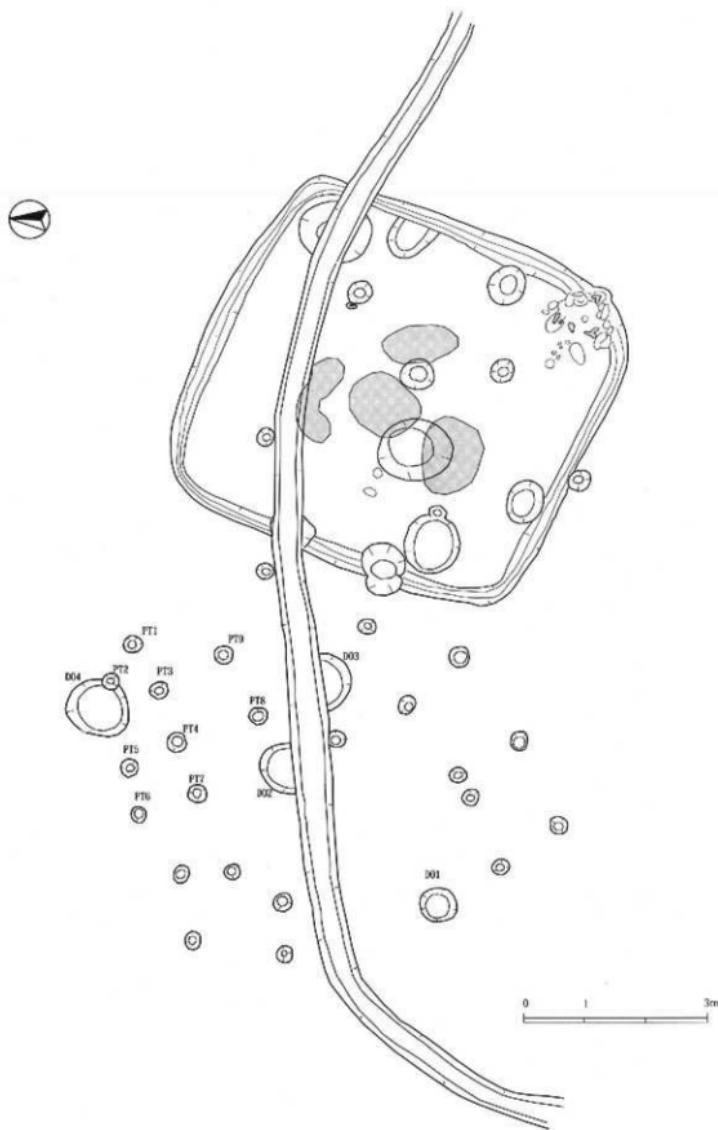
第5図 1号住居跡(1/80)・1号住出土遺物(1/2)



- 1 10Y R2/2(黒褐)に粘土粒が2%、炭化粒が2%混じる。固くしまる。細粒土。
- 2 10Y R2/2(黒褐)に粘土粒が5%混じる。固くしまる。細粒土。
- 3 10Y R3/2(黒褐)に粘土が20%、焼上が10%、炭化粒が5%混じる。固くしまる。細粒土。
- 4 10Y R2/3(黒褐)に粘土粒が5%、焼土が5%混じる。固くしまる。細粒土。
- 5 10Y R7/6(暗黄褐)(粘土)に10YR2/3(黒褐)が40%混じる。固くしまる。細粒土。
- 6 10Y R7/6(暗黄褐)(粘土)に10YR2/3(黒褐)が20%、焼土が5%混じる。固くしまる。粘土。
- 7 10Y R2/3(黒褐)に焼土が1%混じる。固くしまる。細粒土。
- 8 10Y R4/4(褐)に10YR5/6(黄褐)が10%混じる。しまる。細粒土。
- 9 10Y R3/3(暗褐)に焼土が30%、粘土が15%混じる。しまる。細粒土。
- 10 10Y R3/3(暗褐)に10YR5/6(黄褐)が5%混じる。しまる。細粒土。
- 11 10Y R4/4(褐)。しまる。細粒土。

地山 10Y R5/6(黄褐) 固くしまる。細粒土。

第6図 カマド実測図 (1/20)



第7図 1号住居跡・溝・土坑・柱穴 (1/80)

溝状遺構（第7図）

調査区の東、D-3 グリッドに始まり E-4、5、6 の各グリッドを西へ流下し D-6 グリッド内で南へカーブして調査外へ出る遺構である。溝幅は、35cm～45cm、深さは東側が 16cm で西側は 12cm と狭くなる。1 号住居跡やグリッド E-5 内の七坑を切って溝は穿かれている。

出土遺物（第8図 図版3）

1) P-10 は深鉢胴部外面に沈線文を施し、内に貝殻腹縁文の縄文時代早期末、鶴ヶ島台式土器片で、隆辺上に矢羽根状押正を施した 2) P-9 は中期末曾利式土器、ドット 3) P-8 は平安時代の土師器口縁片で口唇が玉環状を呈し、器厚はとみに薄い。推定口径 11.8cm が測られる。4) P-2 は内外黒色の底部片で糸切り痕が認められ内面ヘラ磨きが施されている。5) P-4 は施釉陶器小皿片である。

遺構の時期

縄文時代の遺物は流れ込みのものと考えられる。1 号住から土坑を切っている点から平安時代と位置づけ難い。近世の遺構ではないだろうか。決定付ける資料が乏しい。

暗渠

調査区内西側のグリッド F-7～E-8 で検出された遺構だが調査区北側の法面から更に支所の方へ伸びているものと思われる。検出された暗渠は幅 35cm で蓋石を有し、長さ 10.3m が測られる。偏平な蓋石を除いた溝幅は 10cm、深さ 15cm である。

出土遺物と遺構の時期

黒曜石小剥片と染付陶器片 2 のほか腐蝕が著しい鉄器 1 が出土している。構築された時期については近世のものと思われる。

土坑（第7図）

土坑 1 は、グリッド D-6 に位置し、径 60cm 深さ 33cm 底は平らである。土師器底部片と黒曜石剥片 1 が出土している。前者は内面はナデ、底に糸切り痕が鮮やかで金雲母を多く混じる胎土で色調は橙色である。

土坑 2 は、グリッド E-5 に位置し規模は 95cm × 85cm、深さ 35cm で底は舟底型を呈する。出土遺物はなかった。

土坑 3 は、土坑 2 の東に接しグリッド E-5 に位置する。100cm × 80cm 深さ 30cm で底は舟底型である。出土遺物は、煮炊き用深鉢の底部片、黒曜石石核と安山岩の偏平な丸石 1 である。

土坑 4 もグリッド E-5 に位置し、100cm × 95cm 深さ 35cm で底は平らである。在地系土師器口縁片、天日茶碗口縁の小片、施釉陶器の破片 2、染付磁器破片 4 が出土している。

遺構外出土遺物

縄文時代早期～中期（第9図 図版4）

1) E-3、P-26 平縁深鉢の口縁片で、口唇に刻み目を施し口縁下に細綫文と交互刺突文が認められ、中期初頭五領ヶ台式に比定される。

2) C-4、P-2 口縁に刻み目と集合沈線文を施す深鉢口縁片は前期末十三菩提式に比定される。

3) C-4、P-3 外面に貝殻腹縁文の深鉢片は中期末打越式に比定される。

4) D-4、P-9 深鉢胴部の破片で器面と内面に貝殻腹縁文を施し、早期打越式に比定される。

5) D-4、P-17-1 三角印刻文と突起を有する深鉢口縁片は十三菩提式に比定される。

- 6) D-4、P-7 器面にかすかに羽状繩文の繊維土器片は前期初頭花穂下唇式と思われる。
 - 7) D-4、P-17.2 結節状浮線文の深鉢の小片は前期末諸磯式に比定される。
 - 8) D-4、P-22 波状口縁の波頂部片で結節状浮線文も諸磯式に比定される。
- (第 10 図 図版 5)
- 9) E-4、P-28 結節浮線文を施し内面に三叉文の波状口縁片は十三菩提式に比定され、
 - 10) E-3、P-44 と 11) E-4、P-29 と同時期と思われる。
 - 12) D-4、P-10 小突起と口縁に刻み目を施した深鉢片と 13) E-4、P-27 横帶区画内に連続刺突文の深鉢片は共に中期中葉新道式に比定される。
 - 14) E-5、P-42 半截竹管工具による押引文を四本の隆帯に施し、器面には沈線による渦巻文を施した深鉢片は中期末の曾利式に比定される。

弥生時代 (第 11 図 図版 6)

- 1) D-4、P-21 □縁に刻み目を施文の小型壺の破片は後期に比定される。
- 2) F-7、P-7 頸部に櫛状横線文を挟んで波状文を施文した甕の破片も後期。
- 3) F-7、P-9 脊胴部破片櫛描きの横走羽状条線文は中期に比定される。
- 4) E-7、P-31 壺の肩部片で波状文を施文、後期に比定される。

平安時代 (第 11 図 図版 6)

- 1) D-3、P-18 在地系土師器皿、推定口径 10.6cm、外ヘラ削り後ナデ内ナデ、胎土に金雲母多く、白色粒子含む。色調は褐色、内外スス付着。
 - 2) D-3、P-33 土師器坏、玉縁状口縁で推定口径 13.3cm、色調は橙色で胎上は密。
- (第 12 図 図版 6.7)
- 3) D-3、P-4 在地系土師器の小皿、推定口径 6.4cm、推定底径 4cm 位で、内外ロクロナデ、底糸切り痕、色調橙色。
 - 4) D-4、P-18 在地系土師器環口縁、推定口径 12cm 遺存器高 2.5cm 口唇尖りぎみ、外ナデ内ハケ目、色調は外暗褐色、内褐色、胎上に雲母、石英混じり、やや粗い。

5) E-4、P-4 つまみ状把手(欠落)が付く釜の口縁片で、11世紀に比定された竈下遺跡 7号住からも同じ遺物が出土している

- 6) E-4、P-22 小型皿□縁の破片で推定口径 9cm、内外ナデ、色調は赤褐色、長石、雲母、白色粒子含みやや粗い胎土である。
- 7) E-4、P-25 在地系土師器小皿で推定口径 9.6cm、内外ナデ、色調は淡黄褐色で胎土は乳白色でキメ細かい。
- 8) E-4、P-26 土師器環口縁、推定口径 11.5cm 内外ロクロナデ、キメ細かい胎上、金雲母、白色黒色粒子が含まれる。

(第 13 図 図版 7)

- 9) D-4、P-19 くの字状に曲折した甕口縁片で外斜めハケ目、内横ハケ目、色調は暗褐色で金雲母、白色粒子、小石含む胎土。
- 10) D-5、P-5 在地系土師器小皿、推定口径 8.8cm 器高 / 口径比 0.17、内外ナデ、胎土は白色、黒色粒子混じり粗い、色調鈍い褐色。
- 11) F-5、P-1 在地系土師器小皿、推定口径 9cm 器高推定 1.8cm 器高 / 口径比 0.2、内外ナデ、

色調橙色、胎土に白色粒子含み砂っぽい。

- 12) E-5、P-46 内黒坏、推定口径 13.5cm 遺存器高 3cm 色調外茶褐色、胎土密。
- 13) D-6、P-6-1 在地系土師器坏、推定口径 14.2cm で口唇尖りぎみ、内外ロクロナデ、色調橙色、胎土に金雲母、白色粒子含み粗い。

- 14) D-6、P-6-2 内黒土器坏口縁やや外反りぎみ、内外ロクロナデ、色調外赤褐色、胎土緻密。

(第 14 図 図版 8)

15) E-6、P-36-1 在地系土師器坏、推定口径 12cm、外ヘラ削り後ナデ、内ナデ、色調は淡黄褐色で胎土は粗く、金雲母、白色粒子混じる。

- 16) E-6、P-36-2 在地系土師器小皿、推定口径 9.3cm、内外ナデ、色調は橙色、胎土緻密。

- 17) E-6、P-25 在地系土師器小皿、推定口径 8.7cm、器高推定 1.5cm

外ヘラ削り、内ヘラ仕上げ、色調は褐色で胎土に金雲母多く含む。

- 18) E-7、P-32 糸切り板がのこる土師器底部片で色調は橙色、内外ヘラ削り後ナデ、金雲母少量混じり胎土は砂っぽい。

この他、土師器の底部細片が内黒土器を含め 10 点近く、内外ハケ目の甕の破片、灰釉陶器の胴部小片 2 と底部片 1 などがある。

灯明皿 (第 14 図 図版 8)

1) E-2、P-6 推定口径 10cm 口縁内側にスス付着、色調は暗褐色で胎土に雲母、白色粒子を含み焼成良好である。

2) D-6、P-8 推定口径 8.7cm で口唇やや尖りぎみで内面にスス付着し、外周はススけた茶褐色で、胎土粗く雲母、白色粒子を含む。

- 3) E-7、P-15 口唇丸みを帯び厚い口縁の細片で内面にスス付着している。

中世から近世の遺物 (第 15 図 図版 9)

- 1) E-3、P-45 蓮弁紋と思われる文様の青磁片で 13 世紀鎌倉時代と思われる。

- 2) F-5、P-7 三筋壺に似た壺の胸部で「連刻線の帶文を巡らしている。同時期に比定される。」

3) D-4、P-20 濱戸美濃焼のおろし皿で底面には鮮やかな糸切り痕が残る。14 世紀鎌倉から南北朝期と思われる。

- 4) E-2、P-7 江戸時代の片口鉢の口縁片

(第 16 図 図版 9.10)

- 5) D-3、P-29 削り高台ではなく、つけ高台が特色の陶器底部で高台は無釉である。

- 6) D-3、P-25 江戸時代の小型天日茶碗片である。

- 7) E-4、P-20 茶碗底部、高台にコンニャク印刷が施されている、江戸時代。

- 8) D-4、P-13 鉄分の多い釉で施釉した小型陶器碗、江戸時代。

(第 17 図 図版 10)

- 9) D-3、P-38 高台にコンニャク印刷の施釉陶器底部、江戸時代。

- 10) E-3、P-46 円筒型染付陶器と

- 11) D-4、P-14 染付磁器の口縁は共に幕末。

12) D-4、P-12 溝幅がごく狭い捕鉢片と 13) D-4、P-15 型紙ぎりの染付磁器口縁片は明治時代に比定される。

14) E-4、P-21 施釉陶器の肩部、15) E-4、P-30 器面に青磁釉の陶器並肩部、

(第 18 図 図版 11)

16) E-4、P-23 内外黒色の瓦器で、17) E-4、P-24 白磁片でこれらは江戸時代と思われる。

18) E-4、P-31 幕末の仏飯器陶器片である。

19) E-5、P-47 仏飯器の口縁である。

20) F-6、P-8 重ね積みして焼くため、見込みを蛇の目状に釉剥ぎした皿で、高台も釉剥ぎされている。江戸時代。

石鐵 (第 19 図 図版 12)

出土した石鐵は 18 点で、有聖石鐵 1、平基無聖石鐵 2、円基無聖石鐵 15 である。縄文時代の住居跡が検出されていないので、所産時期については確実に欠けるが姥神遺跡 (1987) 大泉村、上ノ原遺跡 (1999) 須玉町の報告書から小型石鐵が後期前半に増加し、無聖石鐵が主体を占める時期は両遺跡とも中期後半から後期中葉としている。石鐵の長軸長の長さについて、上ノ原遺跡「第 8 章遺構と遺物」の分析の中の五段階の規格を参考にさせていただいた。即ち、S (1 ~ 1.4cm) S (1.5 ~ 1.8cm) M (1.9 ~ 2.4cm) L (2.5 ~ 2.9cm)

LL (3.0 ~ 3.9cm) に分けられ上ノ原では後期初頭に S が突出して多くなるという。

石斧、磨石、凹石 (第 20 図 図版 13)

グリッド E-4 S-3 短冊型小型打製石斧 石材は粘板岩

グリッド D-4 S-5 磨石 安山岩

グリッド E-4 S-4 凹石 円碟で凹みをもつ安山岩

グリッド D-3 S-6 石匙 青灰色の硅質頁岩で白色脈が入る

グリッド D-3 S-7 投弾状石器 (註 -3)

その他の石器 (第 21 図 図版 14)

黒曜石を主体とする搔器、使用痕のある剥片石器と石核状黒曜石が出土している。

まとめ

後田遺跡の特色は三つ挙げる事ができる。

その一として、約 8000 年前の縄文時代早期から前期、中期、更に弥生時代に下って平安時代から中世、近世所産の破片が出土し、北杜市須玉総合支所が所在する周辺及び若神子地区全体に各時代毎の集落が誕生と廃絶の繰り返された暮らしの証として読み取ることができる。その二は、小型石鐵である。比較事例については石鐵の項と重複するので省くとして、住居跡遺構がないことから、土器類と同様に流れ込みなのか、或いは気候の変化から高地からの移住を余儀なくされた結果、後期以降の狩りの対象を低地に求めたためなのか疑問が残る。

その三は、土師器質土器で殆どが口縁部の破片であるが、一号住が検出されたグリッド D-4 を中心に、調査区の精査中覆上内から出土している。北堀遺跡（1985）山梨県教育委員会—VI期（10世紀第四半期～11世紀前半）に比定される 7 号住の壺及び皿は器厚が薄く玉縁口縁となるのと同じものが 2 片出土しているが、これら以外の破片は肉厚で口唇が丸みを帯びるのが大半である。

金生遺跡 1. 中世編（1988）の上師質土器（第 84, 85, 86 図）がその口縁の形状と肉厚の脛部という特徴が類似している。「甲斐型上器」の完全消滅期であり、新しい器種（脚高台坏、脚高高台皿、小皿）が初見する時期即ち 10 世紀末から 11 世紀前期とする森原氏（註 -4）の文献から二之宮遺跡（1987）14 号住出土の P-8 と 279 号住出土の P-8, 10, 12 の小皿を比較した結果、口唇部の丸みのある形状、器厚の厚さのある小皿は森原氏の段階設定のⅢ期（11 世紀前葉から後葉）とする北堀遺跡（1985）7 号住 178 図 3 にも見出すことができる。器体部下半部にヘラ削りではなく、底の回転糸切り未調整の小皿は、グリッド D-3.P-4（第 12 図 図版 3）に見られ、他の小皿も体部外面のヘラ削りが認められない。

狹隘な後田遺跡から出土した遺物によって、年代毎に断続的に集落が周辺遺跡として眠っている事、そして戦国時代武田家御朱印の鍛冶屋があり、それ以前の平安時代末にも鍛冶工房があった事が認識できたことは若神子の歴史の一頁を飾ることになろう。

参考文献

鍛冶工房跡に関係する歴史的資料として須玉町史からの文節を次に抜粋して記載させていただく。

須玉町史 通史編第一巻より

町場としての若神子

宿としてだけではなく、若神子はまた町場としても発展した。北に隣接してある二日市場は応永元年（1394）銘の石幢が残るなど古くに成立した市と考えられ、承正 17 年 9 月 3 日夜、長泉寺で踊り念仏が盛大に執行されたのも多くの人が集まることができる町場だったからであろう（古代・中世 283）。

職人の居住も確認できる。天文 12 年 7 月 2 日付で武田氏から諸役免許された鍛冶職人がおり（古代・中世 297）、同 21 年と推定される朱印状では五人分の閑所通行を許され（古代・中世 307）、武田氏滅亡後の天正 15 年（1587）には徳川氏から甲府から駿府まで伝場一疋の使用を認められている（古代・中世 300。史料編の年紀推定は誤り）。

徳川氏のものは「右衆中」充てで、甲府鍛冶町の源次右衛門・五郎左衛門、台ヶ原の権左衛門も同文の朱印状を所持しており、駿府城造営に甲斐の鍛冶職人が大量に動員されたことを物語るものとされる（「甲斐国史」卷 101）。また、三通を見るといずれも個人名は記されないから、若神子に居住する鍛冶衆に対して与えられたものであろう。その人数は天文 21 年の文書に見える五人もしくはそれ以上だったと思われる。彼らは諸役を免除される代わりに武田氏の命により鍛冶の仕事に従事するとともに、過所（交通手形）を与えられている点から、仕事を請け負うため他国に頻繁に往来していたものと思われる。そのためにも交通の要衝である若神子は住むのに都合がよかったのであろう。江戸時代には役鍛冶三人が若神子に居住するが、彼らはその流れを汲むものと考えられる。

細工奉公をもって武田氏から諸役免許及び大工の支配を認められた惣左衛門もいる（古代・中世 308）。同人の在所は記されないが、文書は若神子村の大工九右衛門藏とされるから、若神子居住は認めてよいであろう。細工奉公の内容も明らかではないが、末裔が大工であるから建築に従事する番匠だったと考えてよい。それを証するように若神子に居住した建築大工三郎左衛門尉がいる（古代・中世 301）。天文 16 年に韮崎市円野町上円井にある宇波刀神社神殿の造営を担当した。建立の大権那である米蔵丹後守は若神子の領主とは考えられないから、同社の建築に関わったのは依頼によるものであろう。つまり、在所以外の工事も請け負うなど広い範囲での活動が想定されるのである。

このように多くの職人が住み、宿・市などの機能と合わせて交通・交易の拠点としての役割を果たしていたことが、「甲斐国志」（巻 12）をして若神子を「四達輻湊ノ要地」といわしめたわけで、峠北における若神子の重要性は中世にも変わらなかったといえよう。

須玉町史史料編第一巻考古古代中世から

7月2日 武田晴信、鍛冶職人の諸役を免許する

天文 12 年（1542）

（定）（竜朱印）

御被官同前

ほうこう甲に

徒みて、かちニ

諸役可有免

許者也、仍

如件

天文 12 年癸卯

7月2日

（若神子・伏見文一家文書）

〔読み下し〕

定め

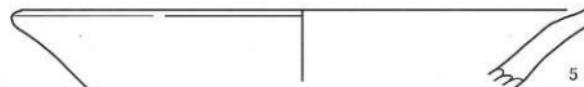
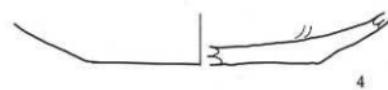
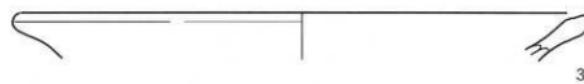
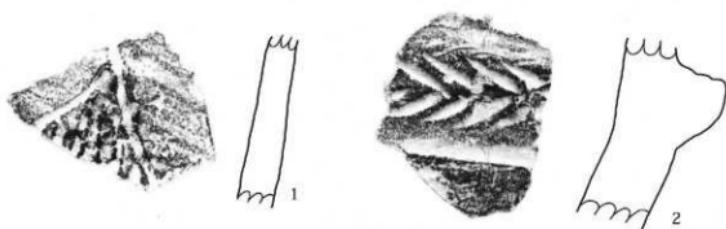
御被官同前に奉公申すについて、鍛冶に諸役免許有るべき

者也。仍て、件の如し。（下略）

〔解説〕

武田家発給の鍛冶文書のうち年代的に最も古いものである。文書の宛名は記されないが、伏見家にはその後の鍛冶に与えられた文書の伝存しているから、在郷鍛冶職人の代表者（職人頭）的役割を担っていた同家祖先に与えられたものと考えられる。鍛冶職人としての被官（家臣）同様の奉公に対する代價指置として諸役（普請役とか棟別役等）が免除されたのである。

- (註 1) 須玉町史 考古・古代・中世・第三節若神子の遺跡 25
- (註 2) 山梨県埋蔵文化財センター
- (註 3) 姥神遺跡（1987）大泉村教育委員会 91 ページ
- (註 4) 丘陵第 14 号山梨県地域における古代末期の上器様相 森原明廣
- 参考資料
- 東久保遺跡（1984）高根町教育委員会
- 北堀遺跡（1985）山梨県教育委員会
- 二之宮遺跡（1987）同上
- 姥神遺跡（1987）大泉村教育委員会
- 宮間田遺跡（1988）武川村教育委員会
- 神取遺跡（1994）明野村教育委員会
- 上ノ原遺跡（1999）上ノ原遺跡発掘調査団
- 研究紀要 19（2003）山梨県立考古博物館
山梨県埋蔵文化財センター



0 (1:1) 3cm

第8図 溝遺構出土遺物



1



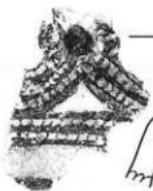
2



3



4



5



6



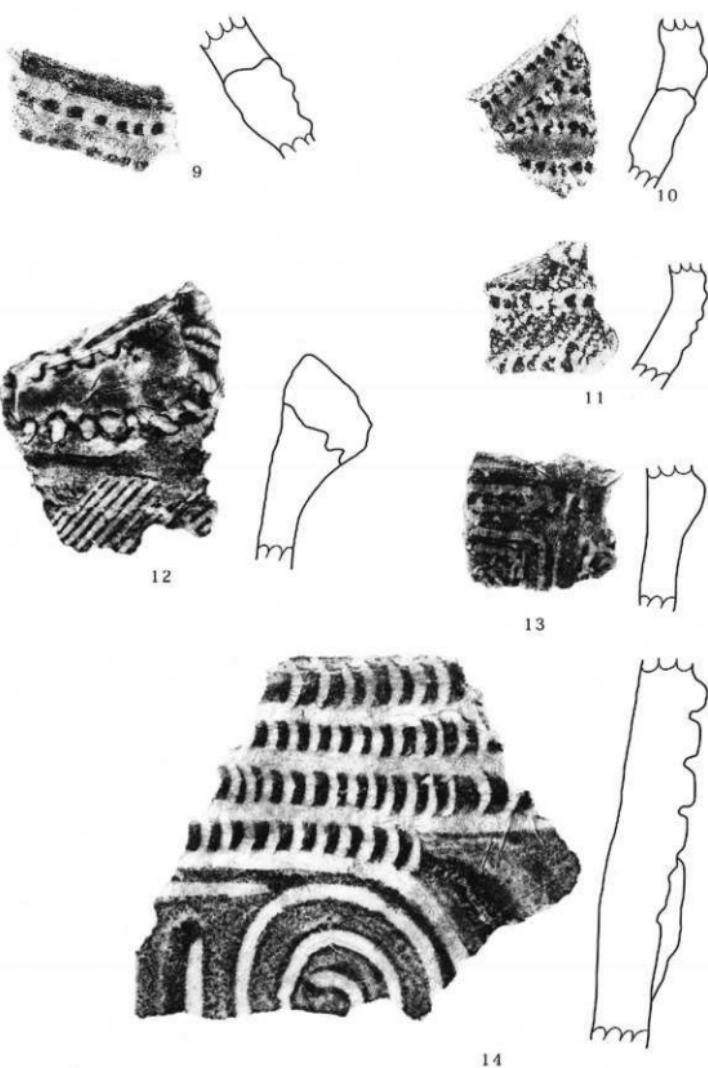
7



8

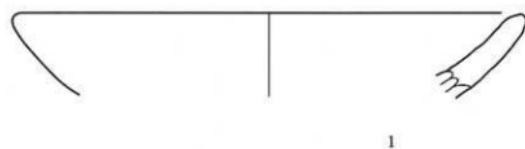
0 3cm

第9図 遺構外出土遺物

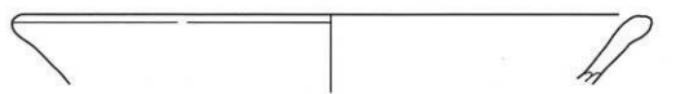


0 (1 : 1) 3cm

第10図 遺構外出土遺物



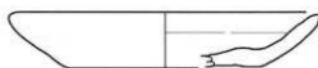
1



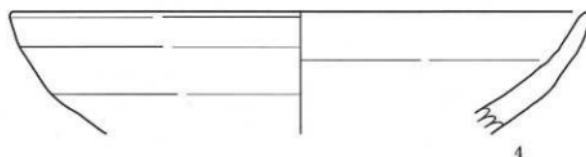
2

0 (1 : 10) 3cm

第 11 図 遺構外出土遺物



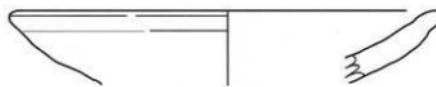
3



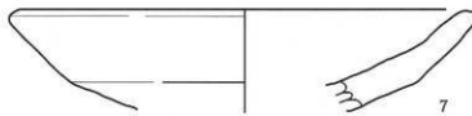
4



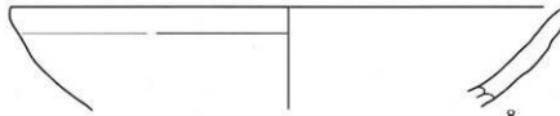
5

0
(1:2)
3cm

6



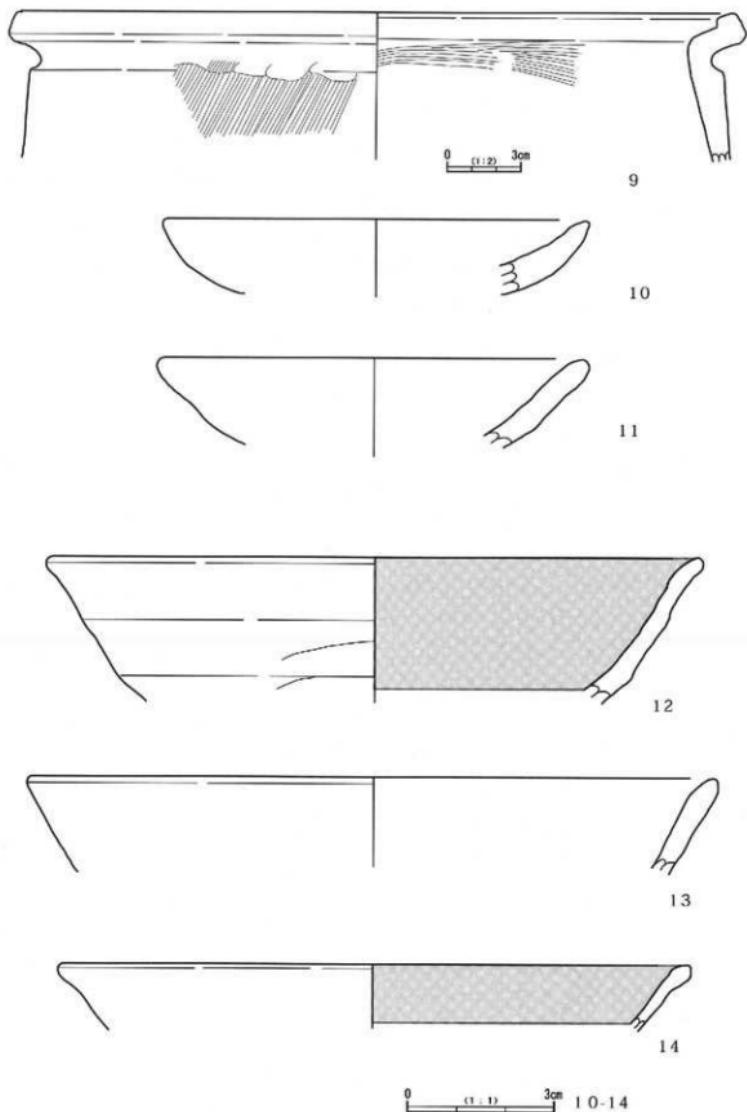
7



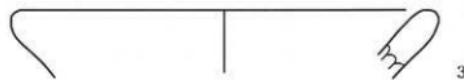
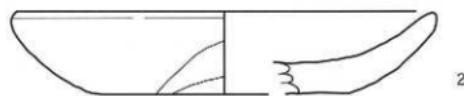
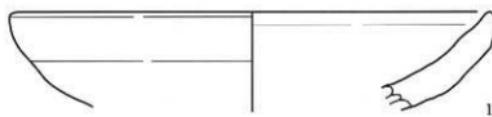
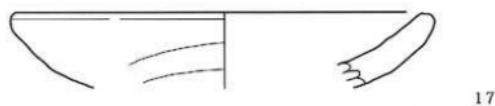
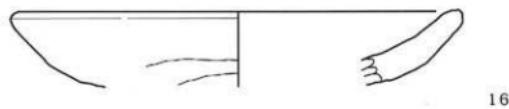
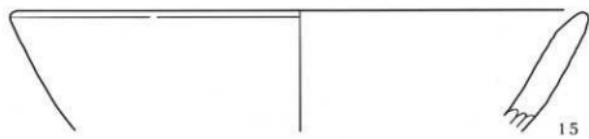
8

0
(1:1)
3cm 3.4.6.7.8

第 12 図 遺構外出土遺物

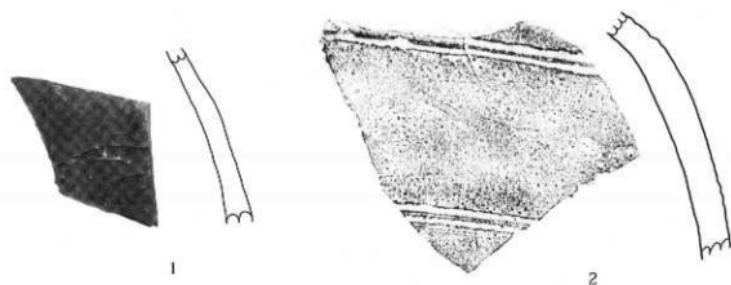


第13図 遺構外出土遺物

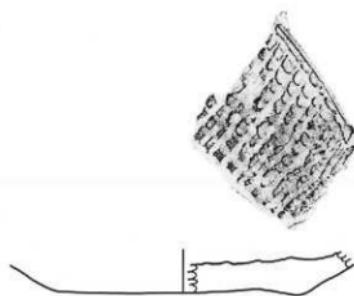


0 1 : 1 3cm

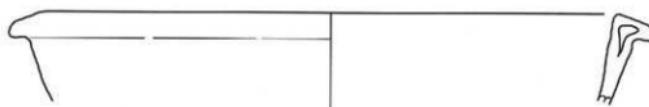
第14図 遺構外出土遺物



0 (2:3) 3cm



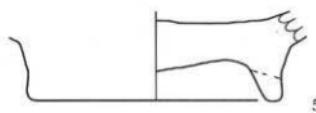
3



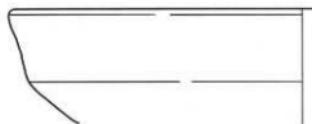
4

0 (2:3) 3cm 2-4

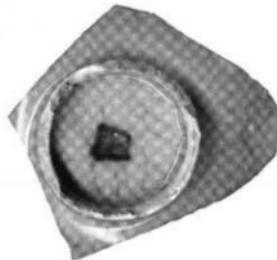
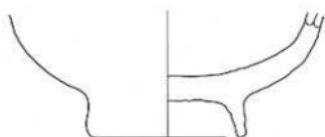
第 15 図 遺構外出土遺物



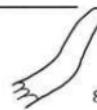
5



6



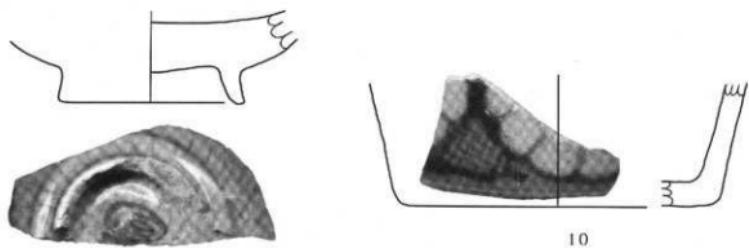
7



8

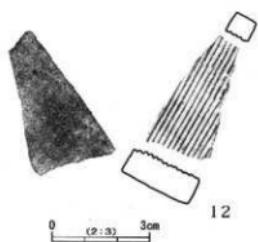


第16図 遺構外出土遺物



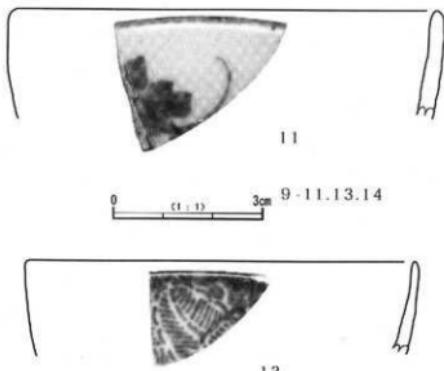
9

10



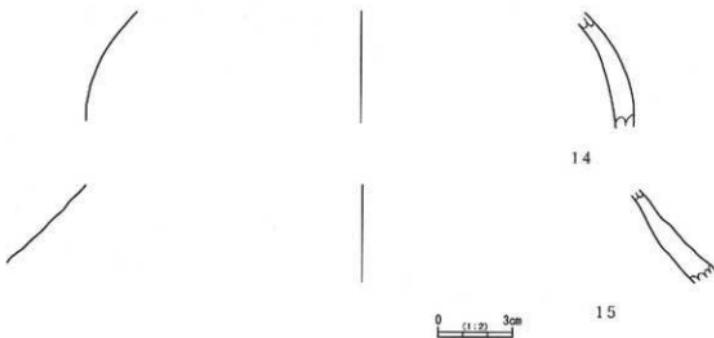
12

0 (1:1) 3cm 9-11.13.14



11

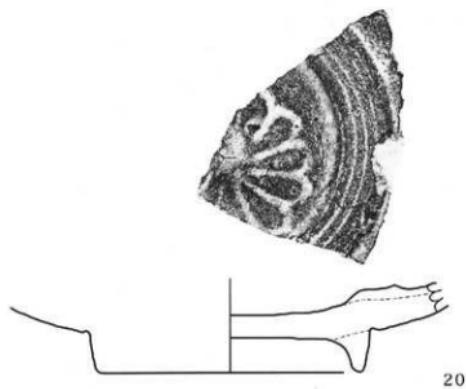
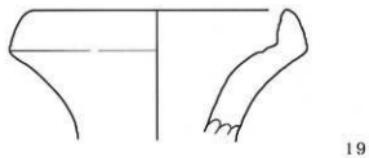
13



14

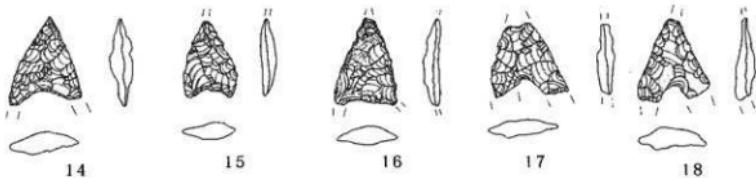
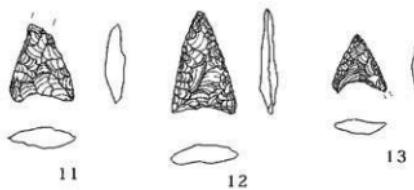
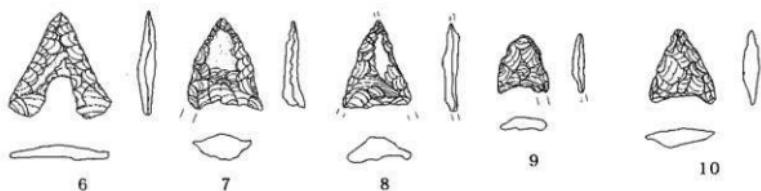
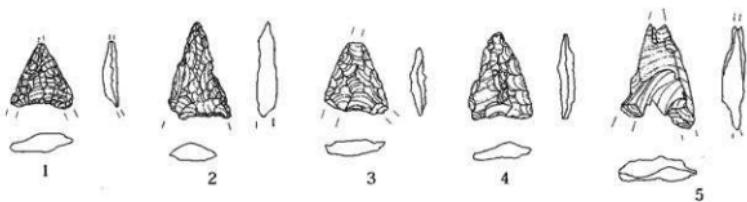
15

第17図 遺構外出土遺物



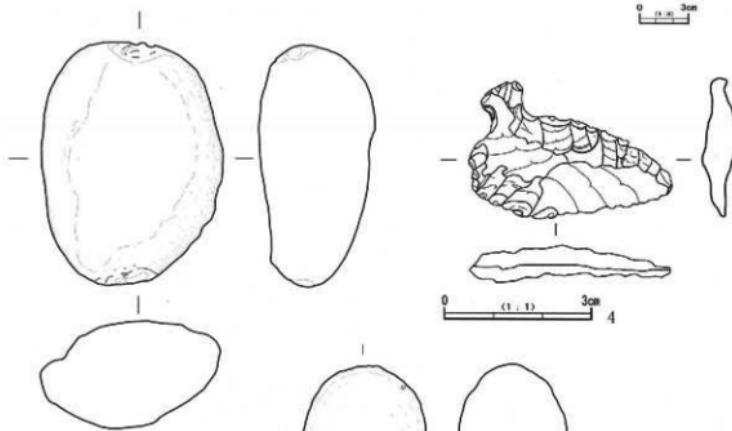
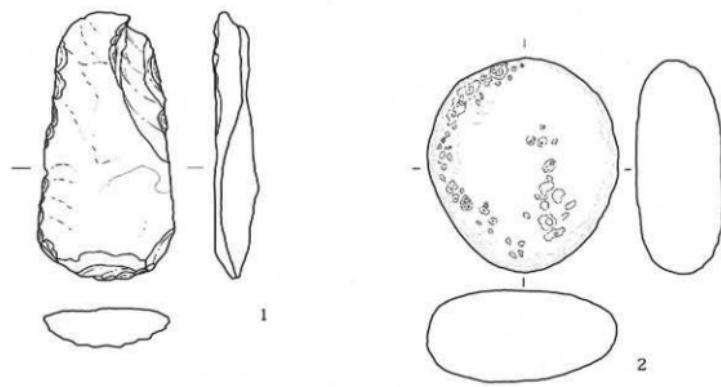
0 3cm
(1 : 1)

第 18 図 遺構外出土遺物



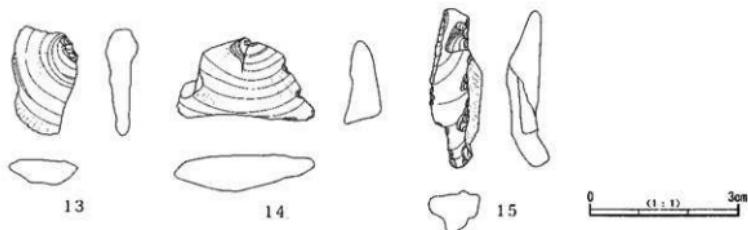
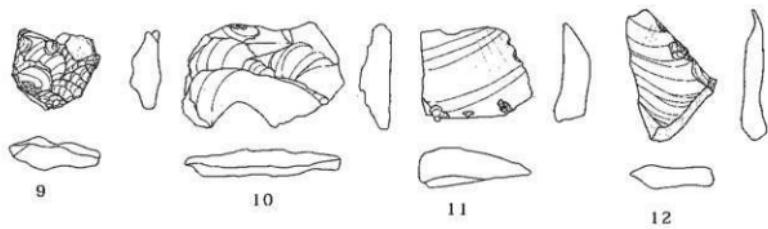
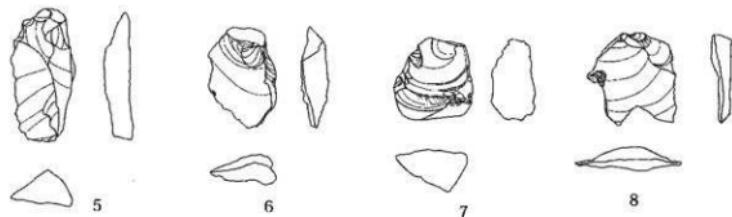
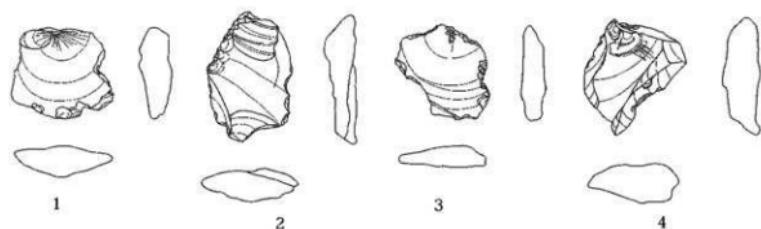
0 3mm

第19図 遺構外山上遺物 石器



0 (2:3) 3cm 1.3.5

第20図 遺構外出土遺物 石器



0 1 : 10 3cm

第21図 逍構外山上遺物 石器

上器觀察表 1

特徴	番号	出土地点	遺物番号	柱別	器種	口径	底径	高さ	色調	系土	整形施文	備考
8	1	MZ	P-10	土器	深鉢				褐色	白色粒子、金雲母	外沈落文施文、内試模底線文	側・島台式
8	2	MZ	P-9	土器	深鉢				褐色	赤色粒子、砂粒子多く含む	縦帶状に矢羽根状押圧施文	留利式
8	3	MZ	P-8	土器	环	118			褐色	白色粒子、石英		
8	4	MZ	P-2	土器	环		5		灰褐色	白色粒子	内側黒色、内面へ3段階、底部半周地	
8	5	MZ	P-4	土器	深鉢	118			オーリーブ褐色	砂粒子多く含む		
9	1	E-3	P-26	土器	深鉢				褐色	白色粒子、黄石	口部斜み且、縦模文と五種類文	五箇・台式[閉]
9	2	C-4	P-2	土器	深鉢				褐色	赤色粒子	口縁削み且・生合沈落文	前縁三井鋸式
9	3	C-4	P-3	土器	深鉢				褐色		沈落内員縦模底線文	早期打撲式
9	4	D-4	P-9	土器	深鉢				赤褐色	赤色粒子	沈落内員縦模底線文	早期打撲式
9	5	D-4	P-17-1	土器	深鉢				純・褐色	白色粒子	三角印籠文	十二音提式
9	6	D-4	P-7	土器	深鉢				黃褐色	石灰、砂粒子多く含む	羽状模文	直筒形内壁丁字型、底部十三
9	7	D-4	P-17-2	土器	深鉢				褐色	赤色粒子、金雲母	粘膜状浮模文	前縁木造輪式
9	8	D-4	P-22	土器	深鉢				褐色	赤色粒子、金雲母	波状口縁、粘膜状浮模文	曲筋木造輪式
10	9	E-4	P-28	土器	深鉢				褐色	砂粒子多く含む	断続口縁、粘膜状浮模文、内又又	十二音提式
10	10	E-4	P-44	土器	深鉢				赤褐色	白色粒子、金雲母	波状口縁、粘膜状浮模文	十三音提式
10	11	E-4	P-29	土器	深鉢				赤褐色	白色粒子	粘膜状浮模文、池文網文	十七音提式
10	12	D-4	P-19	土器	深鉢				赤褐色	白色粒子	口縁斜ら目、口縁下平行弦線文	中間半壺新蓋式
10	13	E-4	P-27	土器	深鉢				赤褐色	白色粒子、金雲母	横帶区画内に連續刻文突起	中間半壺新蓋式
10	14	E-5	P-42	土器	深鉢				褐色	白色粒子、黄石	中央付帯に2段階引目、内側による溝等文	中間末替刃式
11	1	D-4	P-21	土器	小型盤				黄褐色	白色粒子、金雲母	口縁削み目施文	新生後期
11	2	F-7	P-7	土器	盤				黄褐色	白色粒子	弧形狀横模様文、波状文施文	侏生後期
11	3	F-7	P-9	土器	盤				赤褐色	白色粒子、黄石	横擡き斜走状模様文	新生中期
11	4	F-7	P-31	土器	盤				灰褐色	金雲母	波状文施文	侏生後期
11	1	D-3	P-18	土器	皿	106			褐色	白色粒子、金雲母	内ナデ	内外スス付着、在地系
11	2	D-3	P-33	土器	环	133			褐色	砂粒子多く含む、器		
12	3	D-3	P-4	土器	小皿	64	4	11	褐色	青	内ナデヨクナダ	在地系
12	4	D-1	P-18	土器	环	118			暗褐色	雲母、石英、やや青い	外ナデ、内ハケ目	有堆系
12	5	E-4	P-4	土器	釜	26			蓝色	白色粒子、金雲母		内スス付着
12	6	E-4	P-22	土器	皿	9			赤褐色	折石、雲母、白色粒子	内外ナデ	
12	7	E-4	P-25	土器	小皿	96			淡黄褐色	筋土、乳白色でキメ細かい	内外ナデ	
12	8	E-4	P-26	土器	环	115			褐色	食器母、白色漂白粒子、器	内外ロクロナダ	
13	9	D-4	P-19	土器	皿	29			暗褐色	金雲母、白色粒子、小石含む	外斜めハケ目、内横ハケ目	Gの字状に曲折した口縁
13	10	D-5	P-5	土器	小皿	88			純・褐色	白色加色粒子混じり細い	内外ナデ	在地系
13	11	F-5	P-1	土器	小皿	9			褐色	白色粒子含み、砂・灰	内外ナデ	在地系
13	12	E-5	P-46	土器	内墨环	135			外茶褐色	赤色粒子、器	外ヘア削り抜ナダ	
13	13	D-6	P-6-1	土器	环	142			褐色	金雲母、白色粒子含み粗い	内外ロクロナダ	在地系
13	14	D-6	P-6-2	土器	内墨环	13			赤褐色	器底	内外ロクロナダ	

土器観察表 2

序号	番号	出土地点	地物名号	種別	器種	口径	底径	高さ	色調	施土	整形施文	備考
14	15	E-5	P-36-1	土師器	坪	12			淡黄褐色	金雲母、白色粒子含み有り	外へ少刷り後ナデ、内ナデ、	在地系
14	16	E-5	P-36-2	土師器	小皿	9.3			橙色	白色粒子、灰	内外ナデ	在地系
14	17	E-5	P-35	土師器	小皿	8.7			褐色	金雲母	内へ少仕上げ	在地系
14	18	E-7	P-32	土師器	坪	6.4			橙色	金雲母少量混じり、砂っぽい	内外へ少刷り後ナデ	
14	1	E-2	P-6	土師器	灯明皿	10			暗褐色	白色粒子、石英	内スス付着	
14	2	D-6	P-8	土師器	灯明皿	8.7			茶褐色	雪母、白色粒子含み有り	内スス付着	
14	3	E-7	P-35	土師器	灯明皿	8.8			黄褐色	白色粒子	内スス付着	
15	1	E-3	P-45	陶器	甕				灰褐色	砂粒子多く含む	椎井文と想われる文様	13世紀前半時代
15	2	F-5	P-7	陶器陶器	甕				灰褐色	石英、砂粒子多く含む	一連刻線の篆文が記る	前半時代
15	3	D-4	P-20	陶器	おろし皿			7.6	黄褐色	砂粒子多く含む		14世紀前半から南北朝
15	4	F-2	P-7	陶器陶器	片口斧	23.4			灰褐色	砂粒子多く含む		江戸時代
16	5	D-3	P-29	陶器	高台(筒)			5	オーリーブ褐色	白色粒子	つけ高台が特色	
16	6	D-3	P-25	陶器陶器	火口茶碗	12			暗褐色			江戸時代
16	7	E-4	P-30	陶器	高台(筒)			3.3			高台にコンニャク印刷	江戸時代
16	8	D-4	P-43	陶器陶器	小型碗	13			黑褐色	砂粒子多く含む		江戸時代
17	9	D-3	P-38	陶器陶器	高台(筒)			3.8	灰褐色		高台にコンニャク印刷	江戸時代
17	10	E-3	P-46	陶器陶器	瓶			6.4	灰白色	砂粒子多く含む	円錐形、蓮花坐付	幕末
17	11	D-4	P-44	陶器陶器	瓶	10.6						幕末
17	12	D-4	P-42	陶器	壺				暗褐色	本色粒子、石英	溝が底面タイプ	明治
17	13	D-4	P-45	陶器陶器	瓶	8					型紙刷り	明治
17	14	E-4	P-21	陶器陶器	甕				黄褐色			江戸時代
17	15	E-4	P-30	陶器(青釉)	甕							江戸時代
18	16	E-4	P-23	磁器	瓦器				内外墨色	金雲母、白色粒子		江戸時代
18	17	E-4	P-24	白釉器	甕				灰白色			江戸時代
18	18	E-4	P-31	陶器	伝瓶				淡黄色			幕末
18	19	F-5	P-47	陶器陶器	伝瓶	5.2			黄褐色	砂粒子多く含む		江戸時代
18	20	F-6	P-8	陶器陶器	高台付里			5.4	灰褐色	砂粒子多く含む	裏込みを施す只特に施剥離している	江戸時代

地図	番号	出土地点	地物名号	種別	器種	直径	通軸	孔径	色調	施土	整形施文	備考
5	1	一号丘	P-139	土製品	鉢			2.7	橙色	白色粒子	内赤く焼成あり	

石器観察表

拂団	番号	出土地点	遺物番号	形状	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	上/原石端部	石質	重量(g)
19	1	D-2	S-1	凹基無刃 滑部破損	(1.4)	1.3	0.3	SS	チャート	0.4
19	2	D-4	S-6	有茎石鑿 基部片破損	(2.0)	1.0	0.4	M	黒曜石	0.9
19	3	D-4	S-7	平基無刃 端部破損	(1.5)	1.2	0.3	S	黒曜石	0.5
19	4	D-4	S-8	凹基無刃	1.8	1.2	1.3	S	チャート	0.7
19	5	D-4	S-9	凹基無刃 滑部基部破損	(2.2)	1.6	0.5	M	黒曜石	1.0
19	6	E-4	S-5	凹基無刃 扱りが大きい	2.2	2.0	0.4	M	黒曜石	0.7
19	7	E-4	S-6	凹基無刃	(1.9)	1.2	0.3	M	黒曜石	0.8
19	8	E-4	S-7	平基無刃	1.9	1.3	0.3	M	黒曜石	0.8
19	9	E-4	S-8	凹基無刃 端部破損	(1.2)	0.9	0.3	SS	黒曜石	0.3
19	10	E-4	S-9	凹基無刃	1.5	1.4	0.3	S	黒曜石	0.4
19	11	溝	S-1	凹基無刃	(1.6)	1.3	0.4	S	黒曜石	0.6
19	12	上焼4	S-1	凹基無刃	2.1	1.3	0.3	M	黒曜石	0.7
19	13	下焼4	S-2	凹基無刃	1.2	1.1	0.3	SS	黒曜石	0.2
19	14	E-5	S-8	凹基無刃	(1.8)	1.4	0.5	S	黒曜石	0.7
19	15	E-7	S-3	凹基無刃	(1.5)	1.1	0.3	S	黒曜石	0.5
19	16	E-7	S-4	凹基無刃	(1.8)	1.2	0.3	S	チャート	0.7
19	17	E-7	S-5	凹基無刃 滑部破損	(1.6)	1.4	0.4	S	黒曜石	0.6
19	18	E-7	S-6	凹基無刃 滑部破損	(1.7)	1.4	0.4	S	黒曜石	0.6

拂団	番号	出土地点	遺物番号	種別	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	石質	重さ(g)	備考
20	1	E-4	S-3	短鈍型打製石斧	8.3	3.9	1.3	粘板岩	54	
20	2	D-4	S-5	磨石	13.3	11.5	5.4	安山岩	1100	
20	3	E-4	S-4	凹石	7.5	5.5	3.3	安山岩	146.5	
20	4	D-3	S-6	石匙	2.8	4.2	0.6	真岩	5.3	
20	5	D-3	S-7	投掷状石器	4.4	4.8	3.3	安山岩	71.5	
21	1	D-4	S-10	剥片石器	1.9	2	0.6	黒曜石	2.1	
21	2	D-4	S-11	剥片石器	2.7	1.9	0.5	黒曜石	2.1	
21	3	E-4	S-10	剥片石器	1.9	1.8	0.4	黒曜石	1.1	
21	4	E-4	S-11	剥片石器	2.4	1.8	0.8	黒曜石	2.5	
21	5	D-4	S-12	剥片石器	2.8	1.2	0.5	チャート	2.6	
21	6	D-5	S-2	剥片石器	2.1	1.4	0.5	黒曜石	1.2	
21	7	E-4	S-12	剥片石器	1.8	1.4	0.8	黒曜石	2.1	
21	8	E-4	S-13	剥片石器	1.7	1.7	0.4	黒曜石	1	
21	9	E-4	S-14	剥片石器	1.6	1.8	0.6	黒曜石	1.3	
21	10	D-4	S-13	剥片石器	2.2	3.2	0.6	チャート	3.4	
21	11	E-4	S-2	剥片石器	1.9	2.2	0.5	黒曜石	3.3	
21	12	E-7	S-10	剥片石器	2.6	1.7	0.4	黒曜石	1.5	
21	13	D-3	S-5	剥片石器	2.3	1.4	0.4	黒曜石	1.2	
21	14	D-5	S-1	剥片石器	1.7	2.9	0.5	黒曜石	2.5	
21	15	D-6	S-3	剥片石器	3.2	1	0.7	黒曜石	1.6	

写真図版



後田遺跡遠景



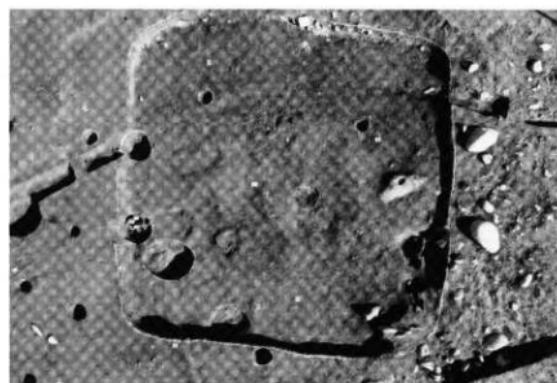
発掘調査前



遺跡全景



発掘現場



1号住居跡



カマド



1

1号住居 出土遺物



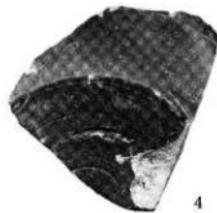
1



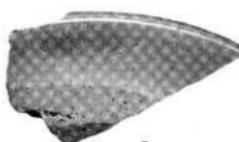
2



3

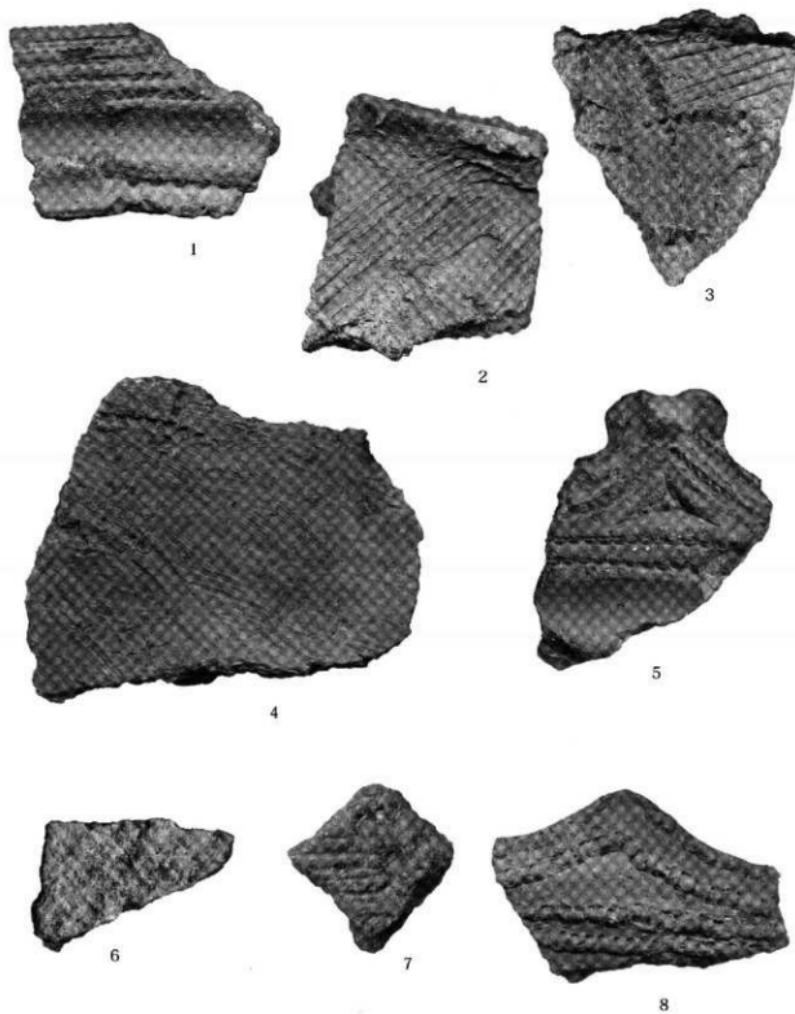


4

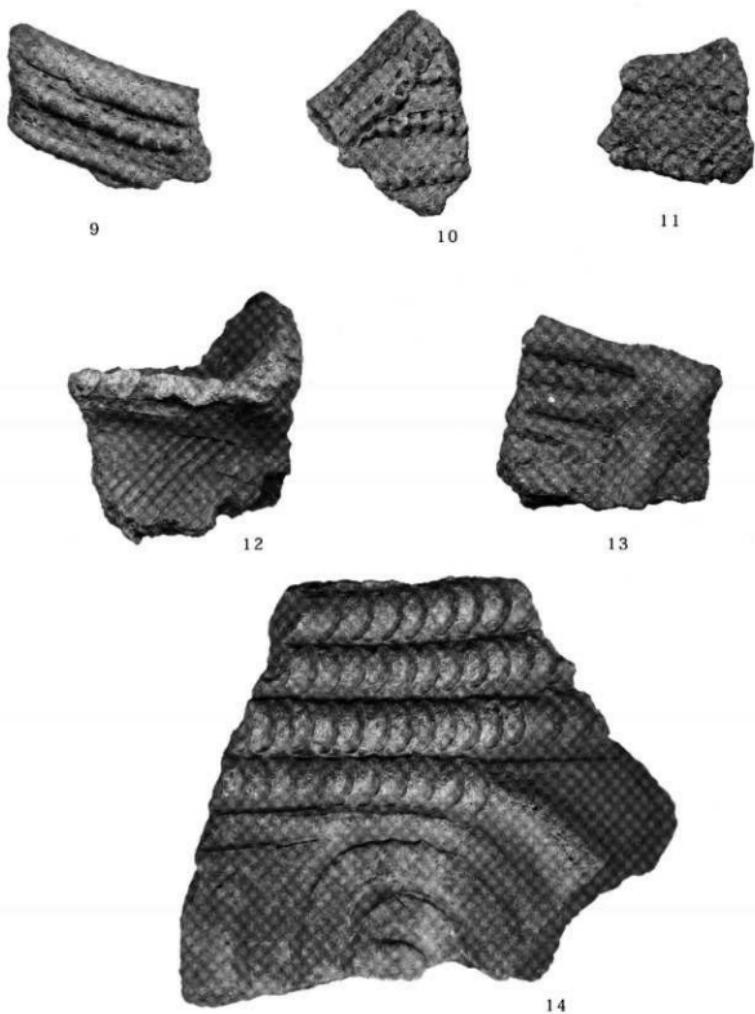


5

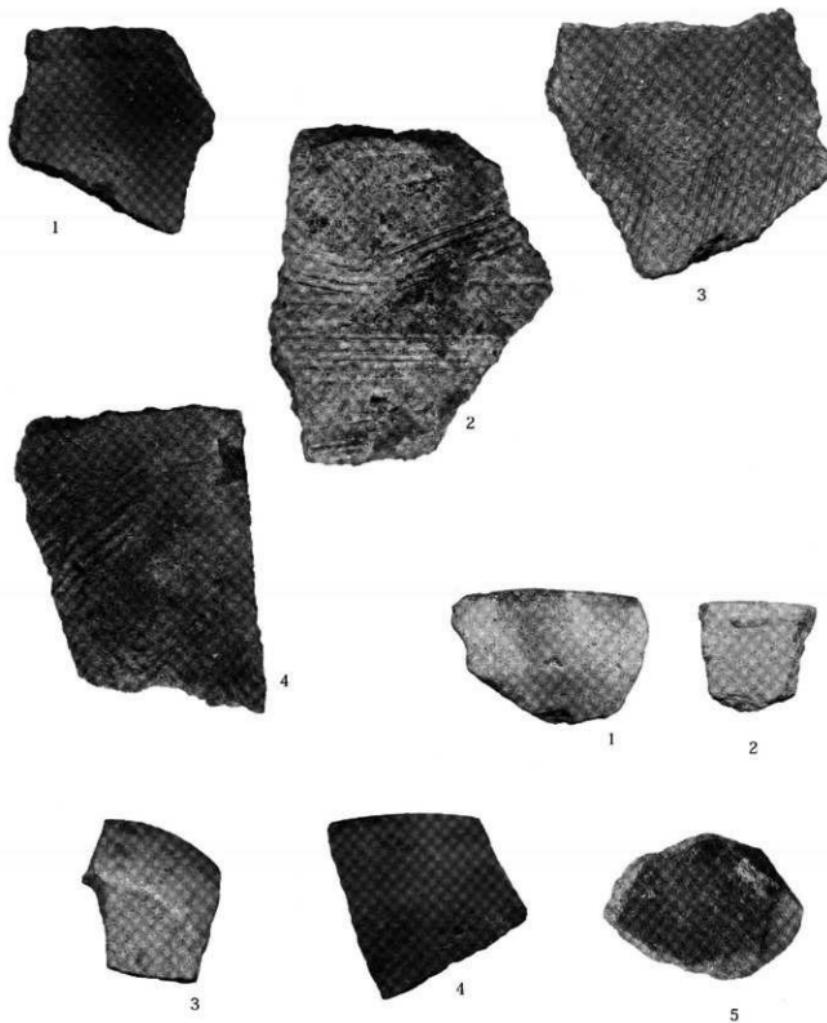
溝遺構出土遺物



遺構外出土遺物



遗构外出土遗物





遺構外出土遺物



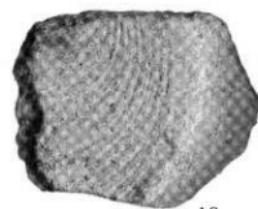
15



16



17



18



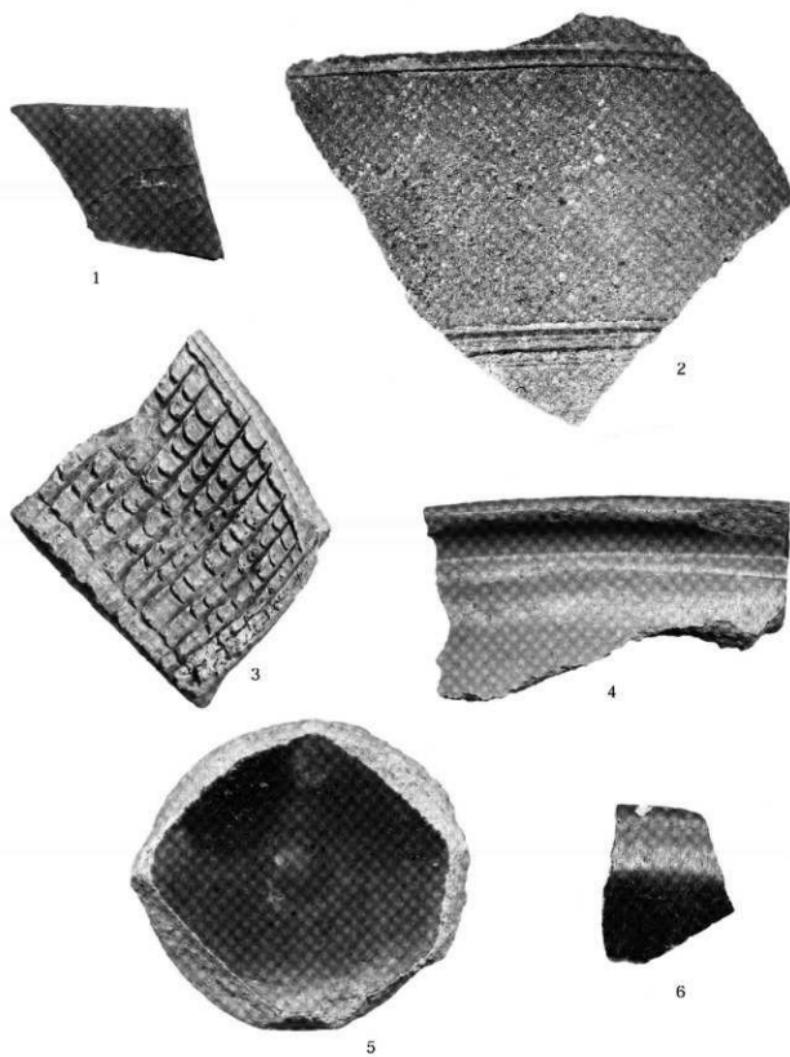
1



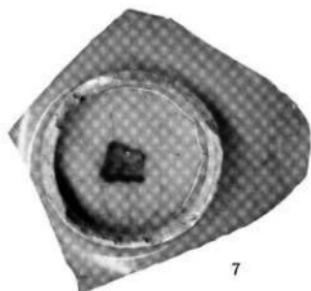
2



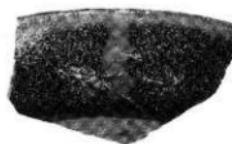
3



遺構外出土遺物



7



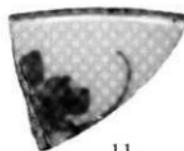
8



9



10



11



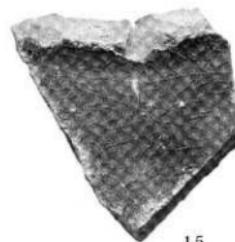
12



13



14



15



16



17



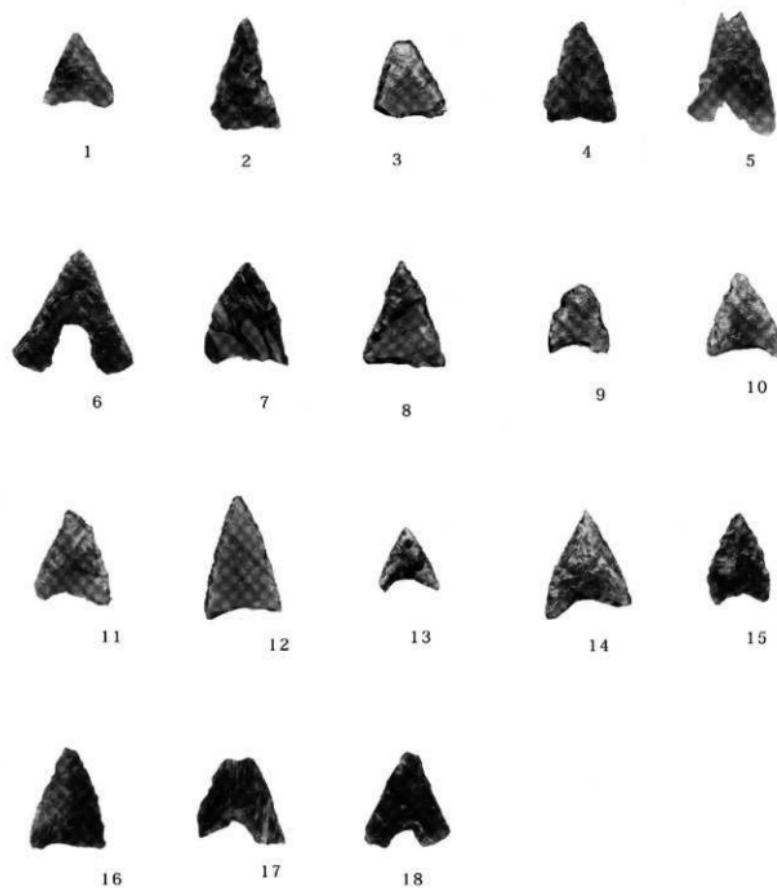
18

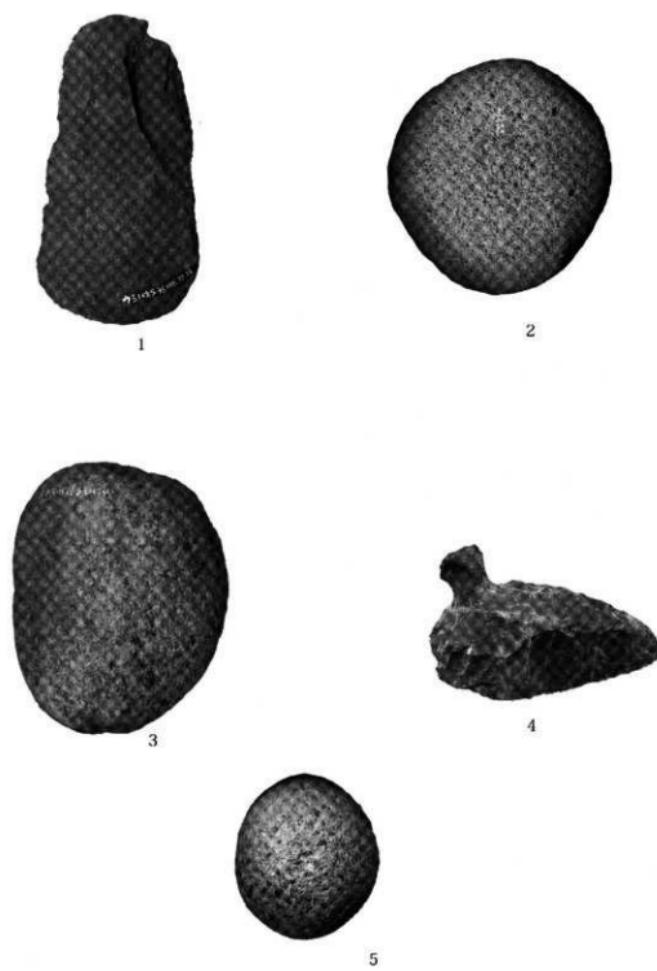


19

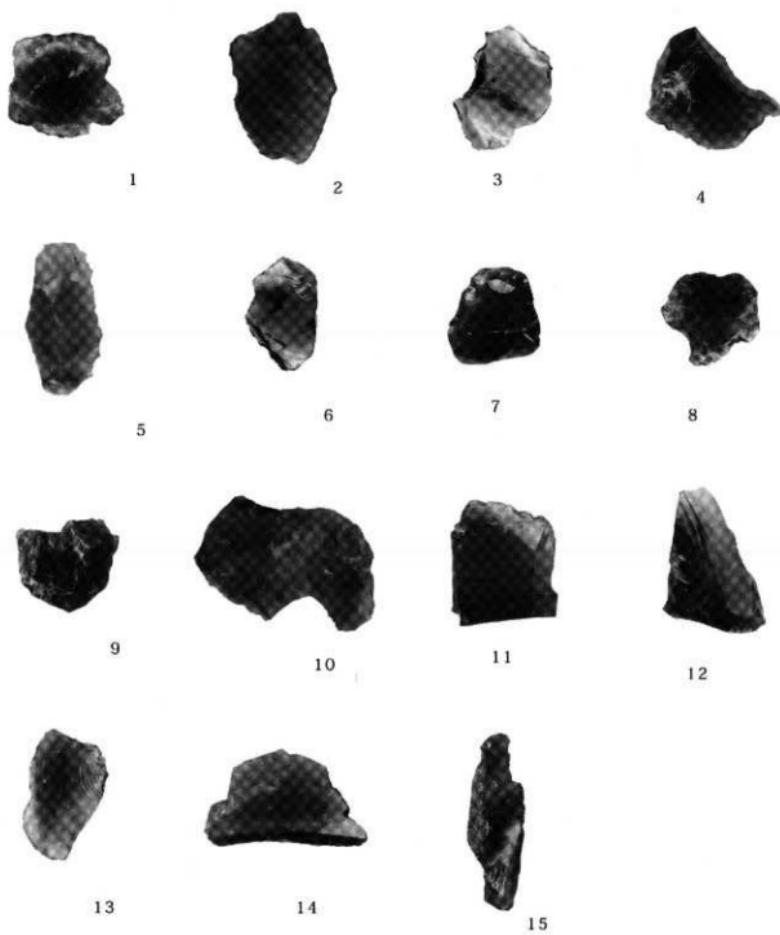


20





遺構外出土遺物 石器



報告書抄録

市道若冲子、大蔵線建設工事に伴う発掘調査報告書

後田遺跡

平成 17 年 3 月 24 日印刷

平成 17 年 3 月 25 日発行

編集 北杜市教育委員会
特定非営利活動法人文化資源活用協会
発行 北杜市教育委員会
特定非営利活動法人文化資源活用協会
印刷 株式会社 ヨネヤ

